

柏島浦庄屋在任中に逝去した清水浦庄屋家系 濱田家 10 代目・濱田千束はまたちづかの墓碑を確認

鹿持雅澄『幡多郡日記』（文化14年〈1817〉8～9月にかけて幡多郡を巡遊したときの紀行文）の8月28日の条に、「庄屋浜田伊蔵千束カ許ニ行テ日暮千束ヨロコフコト限リナシ」と記している。巡遊の途中、濱田千束(1792～1844)が浦庄屋として赴任している柏島を訪問し、その屋敷に宿泊した。和歌を通じて互いに交流を深め、親しく交際していたものと思われる。千束は雅澄の幡多郡における有力な弟子であったと推測される。

教養があり、文芸活動にも長けていた濱田千束は、代々清水浦大庄屋を務めてきた濱田家の10代目当主である。頭脳明晰な千束はその能力を評価され、御畳瀬(高知市南部)大庄屋に抜擢され、赴任した。しかし、藩重役と意見が衝突し、柏島浦庄屋に左遷されてしまう。その後、天保15年(1844)10月24日、柏島で在職中に病死した(『高知県人名辞典』高知新聞社、1999年)。

『土佐清水市史上巻』669～670頁に、これらの経緯について簡単に触れられている。柏島法蓮寺境内脇にその墓碑が安置されていることが記されている。そこには台座に牡丹や菊花、蓮が浮き彫りにされており、台座中段には「土州三崎浦石工 宮崎林右衛門真潮 塚地村石工 井上弥蔵 井上駒之助春成 造之」と墓碑を加工した石工の出身地と氏名が記されていた。現在はその部分の面が剥落している。林右衛門や弥蔵は、現土佐清水市・松尾に建立されている金比羅宮灯明台(安政7年〈1860〉)を加工したことが知られる。おそらく、この千束の墓碑を協働で加工したことが縁となり、地域を越えて協働で松尾・金比羅宮灯明台の仕事をおこなうことになったと思われる。そこには土佐湾岸航路を通じた海路が関係しているのではなかろうか。



『土佐清水市史上巻』669～670頁に書かれている濱田千束の墓を求めて、休日を利用して探索に行ったが1回目調査では見つけることができなかった。先週の土曜日の2回目の調査でついにその墓碑を発見することができた。法蓮寺境内を片っ端から調査し、銘文を解読していったがなかなか見つけることができず、高知県立埋蔵文化財センター松田直則所長(土佐清水市史編集委員)に携帯で連絡を取りつつ、探し当てた。境内墓碑が並ぶ基壇のもう一段高い草木が繁る段にそれを発見することができた(ちなみに松田所長は、先月末に調査でその墓碑を発見している)。



↑ 濱田千束墓碑の裏面

↑ 法蓮寺境内 境内や周辺にアコウの木や珊瑚樹がある。

【編集後記】

昨日、11月7日(日)が暦の上では「立冬」。これは紀元前に使われた「24節気」という古い暦からきている。「24節気」は1年を春夏秋冬の四季に分け、さらにそれぞれの四季を6つに分割する。その最小単位を「節(節気)」または「中(中気)」と呼び、1つが約15日間である。その始まりの節がそれぞれ立春・立夏・立秋・立冬であり、これを「四立(しりゅう)」と呼ぶ。

春	立春⇒雨水⇒啓蟄⇒春分⇒清明⇒穀雨
夏	立夏⇒小満⇒芒種⇒夏至⇒小暑⇒大暑
秋	立秋⇒処暑⇒白露⇒秋分⇒寒露⇒霜降
冬	立冬⇒小雪⇒大雪⇒冬至⇒小寒⇒大寒

立冬は冬の始まり、冬は空気が乾燥し、寒冷となり、コロナやインフルエンザが心配される。新型コロナウイルス感染症は、せき・くしゃみ・会話などのときに排出されるウイルスを含んだ飛沫やエアロゾル(水分を含んだ状態の小さな粒子)を吸入、または、それらを目・鼻・口に接触することにより感染する。第6波を防ぐため、こまめな換気、手洗い、マスクの着用を継続していきたい。皆様も油断せずご注意を。(田村)